

熊本城復元整備事業

熊本市経済振興局観光振興部熊本城総合事務所

熊本城は加藤清正によって1607年に築城されたものである。その後、加藤家に代わり細川家が熊本を治め、幕末を迎えることとなった。明治期に入ると軍が城内に駐屯し、西南戦争の戦いの場となり、ろう城戦を戦い抜き、熊本城の堅牢さが証明された。残念ながら、この戦いの直前に、原因不明の火災により天守閣や本丸御殿など、主要な建物が焼失した。その後、天守閣などを復元してきたが、平成9年度(1997)に「熊本城復元整備計画」を策定し、平成10年度からは本格的な復元整備に取り組んできた。

キーワード：加藤清正、西南戦争、熊本城復元整備計画、史実に忠実な復元、本丸御殿、昭君之間、歴史的遺産、復元、城（郭）

1. 熊本城の概要

熊本城は、加藤清正により1601年から7年の歳月をかけ築城されたものであり、平成19年(2007)に、築城400年を迎えた。

清正は、小西行長とともに肥後半国づつを豊臣秀吉から賜り、1588年に入国した。清正は、国外では「文禄・慶長の役」で朝鮮に出兵する一方、肥後国内では、治水事業に取り組むなど、熊本の基盤整備に努めた。その後、加藤家は2代で改易となり、その後を細川家が引き継ぎ、廃藩置県までの期間を11代にわたり治めてきた。

明治に入ると、熊本城には鎮西鎮台(後の熊本鎮台)が入り、明治10年(1877)の西南戦争(西郷隆盛率いる薩摩軍と官軍との国内最後の内戦)の戦場となったものの、薩摩軍の猛攻に耐え、ついにろう城戦を戦い抜いた。築城から270年後に、加藤清正による築城の完成度が証明された。このような中、西南戦争の開戦直前に、原因不明の火災により、天守閣をはじめ本丸御殿など、多くの建造物が焼失した。火災原因としては、自焼説、失火説、放火説など様々な説が唱えられているが、今回の復元作業の中でも、火災原因を特定することはできなかった。その後、熊本城内には、第二次世界大戦の終結まで軍隊が駐屯し、終戦を迎えることとなった。

加藤清正の築城当時の縄張りは、本丸、二の丸、三の丸をあわせ、周囲約5.3km、面積約98ha。この中に大小天守閣をはじめ、櫓49、櫓門18、城門29を数

えた。

2. 現在の熊本城

現在の熊本城には、江戸時代から現存する建物等(国指定の重要文化財に指定されている。13件)と、昭和35年(1960)に再建された大小天守閣や、市政100周年を記念し復元された数寄屋丸二階御広間などの復元建造物に加え、今回の一連の復元整備により復元されたものなど、多くの建造物が存在する(写真—1)。



写真—1 熊本城天守閣(昭和35年再建)

城域は、一部旧態が失われてはいるものの、旧城域が比較的良好な状況で残されており、旧城域の一部約51.2haが文化財保護法による特別史跡に指定され、

また、約 56 ha が都市公園法による総合公園にも指定されている。

このように、現在の熊本城の位置づけは、文化財であると同時に市民や訪れる方々が安らぐ空間としての公園であり、国内外からの多くの観光客の方々をお迎えする熊本を代表する観光地となっている。

3. 復元整備計画

熊本城の整備に関しては、各方面より様々な答申や報告、提言や意見が寄せられていた。そこで、熊本市ではこれらを踏まえ、平成 9 年度に「熊本城復元整備計画」を策定した（写真—2）。



写真—2 熊本城復元予想図

この計画に基づき、平成 10 年度から今回の一連の復元整備を実施してきており、その概要は以下のとおりである。

（整備方針）

30～50年をかけて、加藤清正が築城時に縄張りとした城郭全体を対象に、往時の雄姿に復元するとともに、市民や観光客に愛され利用される整備を目指し、次の3つの整備方針で整備を進める。

○歴史的建造物の復元と保存

歴史的建造物を史実に忠実に復元する。

○都市の潤い空間としての環境整備

原風景を守りながら、豊かな緑を育成する。

○サービス空間の創出

サービス施設の充実とともに、歴史文化の体験学習の場として整備する。

（整備方法）

城郭を5ゾーンに区分し、そのゾーンに見合った整備を効率的に進めるとともに、整備時期についても短期、中期、長期に区分し整備を進める。

- 本丸ゾーン ……保存・復元ゾーン
- 二の丸ゾーン ……緑の遊園ゾーン
- 三の丸ゾーン ……歴史学習体験ゾーン
- 古城ゾーン ……エントランスゾーン
- 千葉城ゾーン ……文化交流ゾーン

以上の整備方針及び方法で、復元整備の短期計画として、まず歴史的建造物の復元に力を入れることとし、平成 10 年度から築城 400 年にあたる平成 19 年を目標に、6つの建造物（南大手門、戌亥櫓、未申櫓、元太鼓櫓、飯田丸五階櫓、本丸御殿大広間）を復元した。また、平成 11 年の台風 18 号で倒壊した西大手門も、あわせて再建した。

○西出丸一带 総事業費：約 19 億 6 千万円

- ・南大手門（平成 14 年 10 月完成）
- ・戌亥櫓（平成 15 年 8 月完成）
- ・未申櫓（ ）
- ・元太鼓櫓（平成 15 年 12 月完成）

○西大手門（平成 15 年 12 月完成）

総事業費：約 5 億円

○飯田丸五階櫓（平成 17 年 2 月完成）

総事業費：約 10 億 9 千万円

○本丸御殿大広間（平成 20 年 3 月完成）

総事業費：約 53 億 8 千万円

以上7つの建造物とその周辺の堀などを、10年間にわたる短期計画として、総事業費約 89 億円で復元した。

4. 本丸御殿の概要

熊本城復元整備計画における建造物の復元の中で、最も規模が大きく、かつ豪華なものが、本丸御殿である（写真—3）。



写真—3 天守閣と本丸御殿（手前）

本丸御殿は城郭の中でも天守閣とともに中心をなす建物で、藩主の居間、対面所、台所などの機能を備え、大広間、大台所をはじめ数寄屋、書院など多くの部屋から構成されていた。熊本城の本丸御殿は、慶長15年（1610）頃加藤清正によって創建され、その後、寛永10～12年（1633～1635）頃にかけて細川忠利によって改修された建物が幕末まで存続したものである。今回の復元整備では、大広間と大台所及び数寄屋（茶室）の部分で復元した。

復元整備は、「史実に忠実に復元する」という基本方針で進めており、そのためには確かな資料が必要となってくる。昔の資料で設計図的な図面が残っていることは皆無に等しいため、間接的な資料を総合的に解析し、昔の姿を復元する方法をとった。具体的には、古絵図や文献等の資料、そして一番確かなものとして、本丸御殿が焼失する前に撮影された古写真が採用された。また、復元工事に先立ち、復元現場の発掘調査が実施され、この調査で建物の位置が特定されると同時に、参考とした古絵図の信頼性を確認することができた。

このようにして、様々な資料や発掘調査によって、復元のための設計図を作成し復元工事を進めることができたものの、施工に際しても細部の納まりなど様々な面で検討を要する点が生じた。そのような場合には、城内の重要文化財建造物はもとより、全国の類似の建物も参考にしながら復元工事を進めてきた。また、屋根瓦や釘隠しなどの装飾品も、発掘調査で出土したものを基に制作されたものである（写真—4）。



写真—4 本丸御殿大広間建て方作業

5. 本丸御殿の見どころ

本丸御殿には様々な見どころがあるが、代表的なも

のとして次のようなものがある。

（闇り通路）

本丸御殿の地下には、「闇り通路」と呼ばれる地下通路がある（写真—5）。地下といっても、地面を掘って作った通路ではなく、本丸御殿が石垣と石垣の上にまたがるように建っているため、石垣の間が建物の下になり地下通路となったものである。そのため、昼間でも暗く、闇り通路と言われたと考えられている。本丸御殿完成後は、天守閣前広場へ進むためには、この通路を通ることとなる。



写真—5 闇り通路

（大御台所）

建物の中に入って、まず目に付くのが、^{いろいろ}囲炉裏のある大御台所である。^{おおおんだいどころ}囲炉裏での煮炊きなどで生じる煙や熱を外に出すため、屋根部分に、煙出しのための開口が設けられており、そのため天井がなく、吹き抜けとなっている。このような状況であるため、天井部分の小屋組みと呼ばれる屋根を支える構造（写真—6）や、「闇り通路」にもある迫力ある大きな梁があり、



写真—6 大御台所の小屋組み

本丸御殿の骨組みを見ることができる。

(昭君之間)

本丸御殿大広間は複数の部屋で構成されており、それぞれの部屋には、襖や壁などに描かれていた画（障壁画）の題材が基となった名前が付けられている。

大広間の部屋の中でも、最も格式の高い部屋が、「昭君之間」である（写真一七）。この部屋は、床や違い棚、付書院をもつ書院造りで、鉤上段と帳台構が備わっている。昭君之間に描かれているのは、中国の前漢時代の悲劇の美女、王昭君にまつわる物語であり、襖や壁などのほかに天井面にも画が描かれており、本丸御殿の中で最も豪華な空間となっている。



写真一七 昭君之間

また、一説には、昭君之間は「将軍の間」の隠語であり、加藤清正が豊臣秀吉の遺児である秀頼を「将軍」として迎えるために作ったとも言われているが、真偽のほどは不明である。

6. 今後の復元整備

このように、熊本城には、本丸御殿（写真一八）を

はじめ復元整備の短期計画で復元された7つの建造物のほかにも、天守閣をはじめ昭和から平成にかけて復元された建造物と、江戸時代の建物で重要文化財に指定されている建造物など、多数の建物が存在することとなり、徐々に往時の城郭に近づいてきた。



写真一八 本丸御殿大広間

今後の中・長期の復元整備計画については、復元整備が建造物の復元に止まらず城域全体の広範かつ多岐にわたる整備として計画されているため、30年から50年と長期の整備期間を想定している。また、城内にある既存の建造物の中には、老朽化が進み建替えが必要なものもある。このため、今後は新たな建造物の復元計画の推進と同時に、既存建造物の維持補修にも取り組むこととしている。

今後も、熊本城を貴重な文化財として、また、潤いの空間として、さらには観光客の方々に楽しんでいただけるものにするため、往時の勇壮な姿に近づけることを目指し、息の長い様々な整備に取り組んでいくこととしている。

JCMA